

「キラキラネームといわないで！」¹⁾： 新しい名前に対する評価とその現象に取り巻く言説²⁾

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (立正大学心理学部 特任講師)

“Don't call my name *kirakira!*”:

The evaluation and discourse surrounding new Japanese names

UNSER-SCHUTZ, Giancarla (*Faculty of Psychology, University of Rissho*)

Abstract

Recently, Japanese names given to children are said to be undergoing dramatic change, particularly in the ways that they use kanji, making them difficult to read. Criticism of such names—often called *DQN neemu* ('stupid/ill-educated names') or *kirakira neemu* ('glittery names')—has been generally negative, focusing on a perceived ignorance of parents for using kanji 'inappropriately' and their lack of consideration for those who must read them. However, by looking at how such names are talked about in the media and their emergence as a phenomenon, I show that such criticism may not be entirely fair, particularly in that it has primarily been made not by parents or children involved in the giving of such names, but by third parties lacking a full vision of the naming process. In addition, criticism of new names has generally lacked appropriate consideration of history and processes of change, in the sense that it tends to be based on faulty considerations of (1) previous naming practices and (2) how such changes will affect the name-landscapes, so to speak, of the future. Instead, I suggest that new names may be seen as part of the larger discourse on youth problems, thus locating the sense of crisis often expressed within their criticism within a larger framework of socialization and social change.

Key words : kirakira names, naming, youth problems

1. 金八先生の困惑

「さあ、みんなね、今日もう、卒業式終わって、やあ、思い出すね、いろいろ。でも、まあ、最後に私がみんなに言いたいのは、名前、ね、この名前に対して親が付けた思い。これを一つずつみんなに語って、最後、終わりにしていこうよ、ね」と、金八先生のことばでビデオが始まる。馴染みのあるいつもの金八先生がB組の前に立ち、予め生徒の名前を全員丁寧に書いておいた黒板を指しながら、親からの贈り物だという名前を解説し出す。いろいろとあったのだが、親がどれほど子どものことを想って名前を付けたのかを聞き、生徒のみならず、我々テレビの視聴者も、きっと感動するに違いない決め手の一場面である。最初に出てくるのが、「阿部 聖母」である。不思議な名前だが、響きが悪くなく、金八先生の「日本にも、お歳暮という、すごくいい風習もあります。これは、お世話になっている人に、この夏にね、あの、あげる」というフォローで流したくなる。ところが、2番目の名前でその期待

が大きく裏切られてしまう可能性を認めざるを得なくなるのである。「次、市川 泡姫。うん、そうね、あわひめと書いて、あき。まあ、あわひめというのは、まあ、いわゆるソーブ嬢ですね」と金八先生が単調ながら丁寧に説明する。さすがの金八先生でも、「ん、まあ、なんか、こう、市川さんのね、なんか、ビジュアルも、なんかリアルな感じが、私もしております」と、優しいフォローがなかなか思いつかないのである。

いうまでもなく、これはいつもの「3年B組金八先生」ではない。「DQN ネームだらけの3年B組—最後のホームルーム—」というタイトルのこのビデオは、1979年に第1シリーズがTBS系で放送されてから、2007年まで合計8シリーズを迎えてきた「3年B組金八先生」という生徒のことを想う優秀な先生と、様々なチャレンジや問題と葛藤しながら成長していく中学生の学園ドラマの第5シリーズ (1999年10月14日～2000年3月30日まで放送) の最後の場面の替えビデオであり、その中で元の至って「普通」の名前がすべて下記で詳述する漢字の通常でない読みを用いた「DQN

ネーム」に切り替わっている(表1)。名前そのものが、2ちゃんの育児版より2.4万以上の珍しい名前を取集し、サイトへの訪問者によるランキングと評価を設けているという人気サイト・DQName.jp からとったもので、YouTube にアップロードされてからの2年間、350,000回以上の再生回数を集め、ヒットとはいえなくとも、それなりの注目を浴びたと言えよう(futamitter,

2011)³⁾。好評の1千票に対し、悪評が150票に留まることもまた、視聴者の態度を示しているであろう。

当ビデオの背景に、最近流行している赤ちゃんの名前が激変していることに対する意識と一種の危機感が潜んでいる。近年においては、新しく生まれた子どもに付けるものとして「子」が付く女性の名前が激減していることが広く報告されている(小林, 2001 ;

表1 「3年B組金八先生」第5シリーズの名簿とその「DQN ネーム」版

| 名字 | オリジナル | | DQNネーム版 | |
|-----|-------|-------|---------|---------|
| | 漢字 | 読み | 漢字 | 読み |
| 阿部 | カオル | | 聖母 | まりあ |
| 市川 | 雅子 | まさこ | 泡姫 | あき |
| 市村 | 篤 | あつし | 世潤 | よんじゅん |
| 入船 | カ也 | りきや | 黄熊 | ぶう |
| 太田 | アスミ | | 亜菜琉 | あなる |
| 落合 | 加奈恵 | かなえ | 可愛子 | ありす |
| 小野寺 | 良輔 | りょうすけ | 金星 | まあず |
| 加藤 | バーバラ | | 世歩玲 | せふれ |
| 兼松 | 健次郎 | けんじろう | 未守散 | ミスチル |
| 小松 | 由佳 | ゆか | 姫茶 | きてい |
| 佐伯 | 蘭子 | らんこ | 遊女 | ゆめ |
| 桜田 | 友子 | ともこ | 愛里 | らぶりー |
| 塩沢 | 好太 | こうた | 右翼 | ゆうと |
| 鈴木 | サオリ | | 甘露栗 | まろん |
| 関 | 恵美 | めぐみ | 大穴 | だいな |
| 田口 | 三郎 | さぶろう | 光宙 | ぴかちゆう |
| 戸田 | 幹洋 | みきひろ | 紅音 | れのん |
| 中込 | 祥夫 | よしお | 甲子園 | こうしえん |
| 日野 | 敬太 | けいた | 神童 | きっど |
| 平次 | 有里子 | ゆりこ | 我流羅 | がるら |
| 比留間 | 和憲 | かずのり | 美希一 | きつきー |
| 深川 | 明彦 | あきひこ | 魔亜玖 | まあく |
| 松岡 | 敏江 | としえ | 歌姫 | あゆみ |
| 室岡 | 美佳子 | みかこ | 天亜來 | ていあら |
| 茂木 | 照孝 | てるたか | 最高 | まっくす |
| 森山 | 慶貴 | よしたか | 良人 | らびっと |
| 安井 | ちはる | | 蕾美亜 | らびあ |
| 山岡 | 修三 | しゅうぞう | 拳 | なっくる |
| 山田 | 邦平 | くにへい | 昇天 | しょうた |
| 米田 | 真規子 | まきこ | 沙利菜愛利江留 | さりなありえる |

Komori, 2002; 橋本・井藤, 2011等) 他、生まれ順を示す漢数字等もほとんど見られなくなっており(本田, 2005)、男女共に子どもの名前が変化の最中にあるようである。そういった特徴に代わり、当て字的な読みを表す漢字を用いる、もしくは一般的に認められている音訓を変えたり、音と訓を混ぜたりする名前が増えているようである(徳田, 2004; 佐藤, 2007; Unser-Schutz, 2011)。佐藤(2007)の『読みにくい名前はなぜ増えたのか』という書籍の題名から明らかなように、こういった新しい名前の漢字の用い方が多少独特であるが故に、一般的に「読みにくい」と思われており、ビデオのタイトルにも使われている「DQN ネーム」の他に、俗に「キラキラネーム」と呼ばれることが多い。

「DQN ネーム」のように現象に対するネーミングが行われるほど、最近の名前の変化・流行に対する意識が高いことは明瞭である。しかしながら、とくに小林(2009)を除き、そういった変化の背景に着目した研究は少なく、新しい名前に関する言説の研究はほとんどなされてこなかったため、未だに充分検討されていない点が多いのである。そこで、本稿では新しい名前の呼び方に着目することを切口に、こういった名前が社会的にどう受け入れられているのかを考察していく。後程概説する Google トレンドのデータから、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」という呼び方は、両方今現在[2015年]から約8年前から注目され始めたようだが、それぞれの用法やメディアにおける報告・表現の観察から明確になるように、終日否定的な意味で活用されており、場合によって差別的だとさえ言える。このように、近年の新しい名前に対する評価が極めて批判的で問題視されているのだが、その評価は果たして正当なのかという疑問が残る。新しい名前に対する悪評はそう名付けた親あるいはそう名付けられた子どもという第一者ではなく、あくまでもそういった名前を見受けたという第三者によるものである。その評価に意味がないとまでは言えないのだが、第三者のそうした捉え方の基に名付けに取り巻く諸事情に関する情報不足があるため、新しい名前を適切に評価できるものとは必ずしも言えない。そのため、新しい名前の言説をそのまま受け止めるべきではなく、より批判的な姿勢で新しい名前を捉える必要があると考えられる。

本稿の流れとして、最初に新しい名前の背景にある社会的な動きを観察した上、「DQN ネーム」や「キラキラネーム」と批判されている新しい名前に対する評価のあり方を観察し、Google トレンド等のデータを通して、名付けにおける変化に対する意識の推移を考察する。それを際にし、とくに現在、名前をそう評価している側とそういった名前の持ち主である子ども達とのずれと、適切な推測をするための情報不足が、新し

い名前の評価を左右していると論じる。次に、新しい名前が非常に芳しくない評価を受けているののだが、その評価はあくまでも親世代、もしくはさらに上の世代によるものであり、新しい名前の社会的な受け止め方を見るのに、そう名付けられた子どもの立場から観察する必要があると論じる。だが、第三者の評価を観察することは、また別の次元で非常に有意義な試みである。最終的に、上記の分析を通して新しい名前の第三者による評価を観察することにより、最近の名前の裏付けとなっている日本社会の変化とそれに対する反応が見えてくると考えられ、新しい名前の問題を越える社会現象を発見し理解するのに役に立てると主張したい。

2. 新しい名前の呼び方

問題視されている名前の特徴が、主に音と訓読みの混雑・一般に認められている音訓の変化・習慣的でない当て字的用法の他に、名前にしか用いられない名乗り訓や名前によく見られてきた止め字(女性名でいう「子」「美」)を使用しない、また利用される止め字の中でも多様な形式(=用いられる漢字)が見られることにある(徳田, 2004; 佐藤, 2007; Unser-Schutz, 2011)。その典型的な例は、筆者が実際にそう名付けられた子どもに出会ったことがあるという「茶奈」である。ほとんどの人が音読みの「さな」あるいは「ちゃん」と読もうとするが、漢字の意味から連想しない限り、求められている読みの「ていな」にはたどり着かない(図1)。無理ではないとは言え、連想と想像のチューニングが名付け親と合致していなければ、正確に読むことが難しいのは確かであろう。佐藤(2007, p.183)によると、こうした安易に読めない名前は、「(…)十全な機能を果たし得ていない(…)」、つまり、名前が社会的な機能性を失っているため、読む側の負

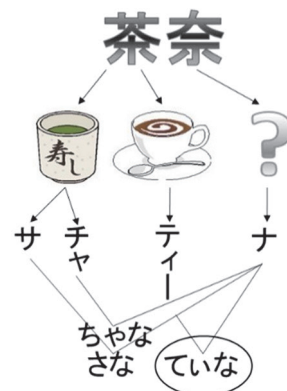


図1 「茶奈」を正確に読むための手順

担が重いという。具体例は下記で取り上げるが、牧野(2012)の『子供の名前が危ない』という題名からでも読み取れるように、こういった新しい名前が場合によって子どもの人生に悪い影響を与えてしまう恐れがあるという声が頻繁にあがっており、佐藤の解釈と同様に、一般的に決してよい傾向だと思われていない。

実際に、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」という呼び方自体が、批判的であることにも注意すべきである。DQN(ドキュン)とは、2ちゃんを中心に普及した俗語で、教養・常識がないことを意味する(はてなキーワード, 2015)。つまり、「DQN ネーム」とは、一般常識のない人が付けた名前といい、それだけでも否定的な捉え方で該当するとされている名前を評価していることが分かる。また、「(…)ドキュンネームというのは、奇抜な名前に不快感、嫌悪感をもつ人々からの呼び方で、「名前を何だと思っているんだ」「ふざけた名前を付けるのもいいかげんにしなさい」といったニュアンスを持っているわけ(…)」(牧野, 2012, p.20-21)で、差別的だとも言える。「キラキラネーム」も、原則として「DQN ネーム」と同様な名前を指しており、重複している部分が多いが、捉え方における差に注意すべきである。「キラキラネーム」という呼び方が、個性的であることを重視していることから、「キラキラ」輝くことに由来しているのだが、牧野(2012)が指摘するように、親が誇りを込めて、自ら使うことがある呼び方である。しかし、第三者が「キラキラネーム」という呼び方を、決して肯定的な意味で使っているわけではないようである。

そのよい例は、赤ちゃん命名辞典というウェブページである。当サイトでは、訪問者が登録された赤ちゃんの名前に評価投票をすることができるのだが、「キラキラネーム」が「人気命名」や「芸能人名」と同様に、メインページにおける独立したカテゴリーとして設定されており、一見では心温かい意味で使われている印象を受けるのである。ところが、「キラキラネーム」の分類法を把握すべく、ランキングの上位の名前の評価を見ると、そうでもないことが一目瞭然である。なぜかという、ただちに「キラキラネーム」の基準が、「目が点…！」への票が多いことに気付くからである。例えば、2015年2月3日現時点の1位の「水子」は実に90.23%の悪評を受けているのである(赤ちゃん命名辞典, 2015)。さらに、それでも中性的な立場を保っているように見えても、微妙なところでサイトの態度が読み取れる。見落としても不思議ではないのだが、実は「キラキラネーム」のリンク先を見ると、「~/itai.php」となっている(赤ちゃん命名辞典, 2014)。「痛い」には、見るに堪えないといった意味合いもあり、やはり「キラキラネーム」が否定的な意味で用いられ

ていることが痛感するであろう。

このように、「キラキラネーム」という呼び方は「DQN ネーム」と比し、やや中性的な呼び方ではあるが、個性を何よりも重視したことに対する皮肉的な意味で用いられることもあり、必ずしも肯定的な呼び方だとは言えないのである。いずれの場合でも、その呼び方自体に、近年の流行している名前に対する批判が読み取ることができ、それらがいかに悪い評価を受けていることが明瞭である。なお、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」の既存している否定的な評価が非常に強いため、ここではそういった呼び方を避けることにする。また、牧野(2012)がより中性的な呼び方として「珍奇ネーム」を提案し採用しているのだが、本稿では問題視されている新しい名前が果たして「珍しい」と呼ぶべきかという批判的な姿勢を取るために、あえて曖昧な「新しい名前」と呼ぶことにし、あくまでも通常ではない漢字の読みもしくは組合せを用いた名前を指すものとする。(その意味では、「水子」のような名前は本稿でいう新しい名前には入らないことに注意すべきである；脚注4を参照)

3. 傾向の始まり

さて、新しい名前の言説にかかわる重要な問題の一つは、果たしてそういった名前がいつから流行するようになったのかである。名前の傾向が流動的であるため、この問いはそう簡単に答えられるものではないが、上記の傾向に対する意識がいつから高まってきたのかということであれば、過去の新聞記事や先行研究の出現時期から得られる知恵が多い。当然ながら、「DQN ネーム」「キラキラネーム」というネーミングが行われるのには、新しい名前に対する意識がある程度高まっていないといけず、傾向そのものがさらに過去に遡るのであろう。小林(2009)によると、1993年10月に創刊された『たまごクラブ』という、出産を中心とする子育て情報誌新しい名前の普及に大きな影響をもたらしているのだが、新聞記事であれば、「いまどきの名前」に対する苦情の記事が1999年にでもすでに見られている(牧野, 2012にて報告)。また、読みにくい名前が増加していることを示唆する研究報告もこの時期より見られるようになった。2007年に『読みにくい名前はなぜ増えたのか』を執筆する以前に、佐藤は2002年の論文でその基盤となる初歩的な分析を行っている。さらに、後に個性的な名付けの動機と満足に関する研究(徳田・水野・西館・西村・安心院・大越, 2013)や名前が正確に読まれぬ経験に関する研究(大越・徳田・水野・西館・西村・安心院, 2013)にもかかわっている徳田が、佐藤の2年後に読みにくい名前の分類を試みている(徳田, 2004)。

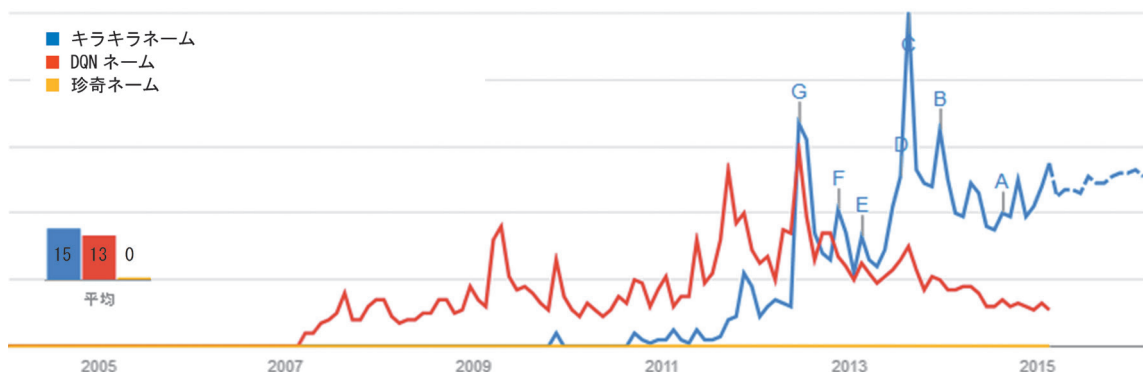


図2 キラキラネーム・DQN ネーム・珍奇ネームの標準化された歴史的検索数（2004年～2015年まで；Googleトレンド（2015）より調整。平均は標準化された際の検索指標平均値。2015年より先のデータは過去傾向による予測。）

このように、遅くとも1990年代中旬から新しい名前の傾向が始まったと考えられるが、その現象を表すネーミングが行われるほど問題として認知されるようになったのはさらに数年後である。キーワードの流行性を示すという Google トレンドのデータを用いれば、少なくとも「DQN ネーム」「キラキラネーム」という呼び方への注目が2007年頃芽生えたと考えられる。Google トレンドは、Google における全検索件数の中での標準化された検索件数を示すツールであり、キーワードの流行性を追究するのに役立つものである。新しい名前に対する意識の指標としても有用だと考えられるが、「DQN ネーム」「キラキラネーム」「珍奇ネーム」を調べた結果、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」がキーワードとして普及しはじめたのは、それぞれ2007年3月、2010年9月であることが分かった（Google トレンド、2015）。

また、図2に示すように、「DQN ネーム」が現象のネーミングとして最初に出回ったのにもかかわらず、2012年6月より「キラキラネーム」に追い越され、今では「キラキラネーム」の方が主流となってきている

ようである。また、牧野が差別的でない中性的な選択肢として提案した「珍奇ネーム」の平均指標は0点であり、ほとんど意識されていないことが明瞭である。読売新聞のアドバイスや意見を求めることが出来る女性向け電子悩み掲示板・発言小町と知識や知恵を分かち合うことを目的にする電子掲示板・Yahoo! 知恵袋においても、子どもの名付けに関する投稿が頻繁に見られるが、「DQN ネーム」「キラキラネーム」をキーワードとしたものが2007年頃を境に現れるようになった（表2）ことも、「DQN ネーム」「キラキラネーム」が現象として注目され始めたのがこの頃だという裏付けとして有効であろう。

4. 新しい名前の語られ方

ところが、Google トレンドの重要な特徴の一つは、検索のピークの近くに発表された関連ニュースも載せられることであり、これらを観察することによって、新しい名前の語られ方に関する知恵が得られる可能性がある。表3に示すように、「キラキラネーム」に関する記事が実に七つ挙げられている。（「DQN ネーム」の

表2：Yahoo! 知恵袋と発言小町の「DQN ネーム」「キラキラネーム」に関する投稿数（2014年11月1日の検索）

| 投稿・更新日 | DQNネーム | | キラキラネーム | |
|--------|-------------|------------|-------------|------------|
| | Yahoo!知恵袋 | 発言小町 | Yahoo!知恵袋 | 発言小町 |
| 件数 | 7,262 | 75 | 4,899 | 139 |
| 最新 | 2014年10月29日 | 2014年8月31日 | 2014年10月29日 | 2014年10月6日 |
| 最古 | 2007年5月2日 | 2009年5月11日 | 2008年1月21日 | 2008年8月12日 |

表3 Googleトレンドで見られた関連ニュース(図2の「キラキラネーム」の検索結果よりまとめ。ピークは、図2のピークを指す。)

| 日付 | 出現先 | 題名 | ピーク |
|----------|------------|--|-----|
| 2012年6月 | マイナビニュース | 宇多田ヒカルは「かわいそう」、しかし芸能界にはキラキラネームがたくさん? | G |
| 2012年11月 | マイナビニュース | 難問過ぎるキラキラネーム試験 春夏冬くん・日桜ちゃん・月下美人ちゃん——あなたは読めますか? | F |
| 2013年2月 | マイナビニュース | 「こんなキラキラネームはいやだ!」子供による「改名」が認められる条件は? | E |
| 2013年8月 | 読売新聞 | 「キラキラネームやめて」…小児救急医つぶやく | D |
| 2013年12月 | スポーツニッポン | 2013年のベストオブ・キラキラネームは「泡姫」 | C |
| 2014年1月 | J-CASTニュース | 「亞墮夢(アダム)」や「優万旗(やんた)」ありがた迷惑な「キラキラネーム」推しに苦惱 | B |
| 2014年8月 | 読売新聞 | 私の名前はキラキラネームです。 | A |

関連ニュースはなかった。) 中でも、とくに宇多田ヒカルがツイッターで難読の名前が「かわいそう」という発言をまとめた2012年7月のリアルライブ(2012)の記事がきっかけで、「キラキラネーム」というキーワードで新しい名前に対する注目が高まったようである。ここで注目すべきなのは、リアルライブの記事と同様に、やはりどの記事でも、新しい名前の取り扱い方が極端に否定的で、概して批判的であることである。その例として、2012年11月の「難問過ぎるキラキラネーム試験 春夏冬くん・日桜ちゃん・月下美人ちゃん——あなたは読めますか?」(八木澤, 2012)と2013年2月の「「こんなキラキラネームはいやだ!」子供による「改名」が認められる条件は?」(川添, 2013)を詳細に観察しよう。

まず、「難問過ぎるキラキラネーム試験 春夏冬くん・日桜ちゃん・月下美人ちゃん——あなたは読めますか?」は、クイズに近い形式でDQName.jpより読みにくいと思われる名前を紹介していくものだが、一見してとくに否定的な姿勢を取っているわけでもなく、娯楽を目的に、読者に豆知識というつもりで流行(=新しい名前)を面白くシェアしているようである。しかしながら、詳細に見ていくと、取り上げられている名前に対するコメントはかなり辛辣だと分かる。例えば、「莓」「杏」「陽子」と書く名前に対し、次のような感想がつけられている。

そのまま読んではいけないシリーズ。「はな」「あんじえ」「びびび」という答えを見ても、その理由の想像がつかず、しばしばパソコンの前で固まってしまう

ました。筆者が小学生の頃は、両親に名前の由来を聞く宿題が出たものでしたが、最近はどうなのでしょう。聞いてみたいような、聞きたくないような。

本来は、両親に名前の由来を聞くことは、生まれる前から親が子どものことをどれほど想って我が子に会うのに待ち兼ねていたことが伝わる、つまり親子の絆が深まり、喜びをもたらす経験だと考えられる。だが、「聞いてみたいような、聞きたくないような」という躊躇めいた書き方から、新しい名前を付けられた子どもにとっては、それがもはや喜びの経験ではなく、むしろ自分の親を疑問に思う経験になり兼ねない、という裏の主張が読み取れる。同様に、続いて見られる「その中で「海月」という名前が気になりました。普通に読むと「くらげ」なのですが…。名付け親の発想は脱帽ものです。」に使われる三点リーダー(「…」)と続いて来る「脱帽」から、「謎」の名前に対する著者の言いよどみと、不快感までは行かなくとも呆然とした様子が感じ取れてくる。また、同じ「海月」と書く名前に対する多様な読みに対し、続いて「自己紹介や飲み会などのネタには困らないとは思いますが、説明する方も大変そうです」と推測される。最終的に、そう名付けられた人に対する同情を見せながらも、そうして軽い「ネタ」として評価することによって、本来ならば尊重されるべき想いが否定される、とも言えるのではないか。

次の分析対象は、読みにくい名前の普及に伴い、改名を希望する人も増えていくことを見越して、予めアドバイスを提供している「「こんなキラキラネームはい

やだ！」子供による「改名」が認められる条件は？」である。この記事の特徴として、そういった名前前で名付けられた人の目線で書かれていること、つまり、改名したいであろう側の利益が中心になっていることが指摘できる。例えば、当記事では、改名をする動機として次のようなことが挙げられている。

俗に「キラキラネーム」と呼ばれるこれらの名前。きっと親は「個性豊かな人間に育ててほしい」との願いを込めてつけているのだろうが、子供からすれば「ちょっと恥ずかしい」という思いもあるだろう。ライフネット生命保険が実施した調査では、就活において「キラキラネームよりも古風な名前のほうが有利」という採用担当者のアンケート結果も出ており、キラキラネームがハンデとなる場合すらあるようなのである。

つまり、「恥ずかしい」という個人的な感覚と、面接といった場で損する可能性を指摘し、個人の感情的評価と社会における損失という二つの側面から、改名する動機をまとめている。洞察力のある読者は、自ら確認できるようにリンクがついていないことにただちに気付くだろうが、とくに後者の理由に関しては、著者の私見（推測）を越えたデータにも支持されていることに触れることにより、いかにも信頼性のある議論かのようにアピールしていることが分かるであろう。著者のことばを借りれば、このように新しい名前が直す術がある限り直した方がよい「ハンデ」と見なされていく。その後、「愛情をもってその名前をつけた親からすれば残念なことだろうが、名前を使うのは子供自身なので、仕方がないことだといえるかもしれない」と、親に対する同情を示すが、「だろうが」が用いられることで、その感覚が弱まり、結果的に名前を変えたい気持ちがあることかのように提示され、読者も同じ価値観を持つように促される。

5. 新しい名前に対する評価の基準

こうして新しい名前に対する新たな意識は、あくまでも問題的な眼差しをもったことであり、「読みやすい」「普通＝みんなと一緒に」の名前を付ける・欲するように促進するものだと考えられる。むろん、各記事に取り上げられている名前が、甚だしく特殊な読みを用いていることが問題で、「普通」の名前により近い名前であれば、個性的であってもとくに批判はしない、と主張する声もあるだろうが、そういった主張の裏に、「DQNネーム」「キラキラネーム」と呼ばれている名前と、「そうでもない」「普通の」名前には明瞭な線引き、つまり一定の基準があるという前提が必ずあるはずで

ある。しかしながら、本当にそういった「基準」があるか、またそういった基準がそもそも存在し得るものか、と疑問を持つ余地が充分にある。

元々、近年の新しい名前が対立となっている規範的な名前が、今日でいう一般人の間ではさほど歴史的に長いルーツを持っているとは必ずしも言えない。「子」で終わる女性の名前は、明治時代に入るまでは貴族の間でしか名付けることができず、一般人の間で広く普及し出したのはその後である（Komori, 2002）。また、「子」の付く名前の波が、思われている以上に早期に衰退していったことも指摘できる。Komori (2002) が示すように、「子」の付く名前が1920年代にピークを迎えてから、少しずつ減り、「～み」で終わる名前や2拍という一定の音律を守った名前が流行するようになっていった。また、円満字（2005）が指摘するように、1960年代からすでに意味とは関係なく、読みを表すためにのみ漢字を用いるという万葉仮名に近い名前が多く見られ、当時の新しい名前の特徴として一般的に意識されていた。こうしてみると、近年の新しい名前の普及で「子」の付く名前が減少していったのではなく、すでに始まっていた変化に終止符を打ったに過ぎないのである。

実は、同様なことが冒頭に取り上げた「金八先生」についても言える。この替えビデオの名前がたしかに衝撃的だが、元の名前でも当時の傾向を正確に反映しているとは安易に断言できないのである。米国の Social Security Data と比べ、日本の姓名傾向を観察するためのデータが乏しいのだが（Unser-Schutz, 2014）、1912年まで遡って加入者の間に生まれた子どもの最も人気な名前を分析している明治安田生命保険がことに有用であり、第5シリーズの登場人物と同じ1985年生まれの子どもの上位10上位人気の名前を観察するのに役立つ（表4）。まず、女子15人中、「子」の付く名前が五つもあるのだが、明治安田生命保険のデータでは、上位10上位の名前に、「子」の付くものが一つのみである。また、女子の名前が仮名で表記されることが多いイメージがある（Taylor & Taylor, 1995）という意味で、バーバラというハーフの生徒の名前を除き、仮名表記のものが四つもあるという金八先生の子供生徒、一般的な見方をよく反映しているのかもしれないが、明治安田生命保険のデータでは、1985年の上位10上位に入った平仮名によるものは一つのみで、片仮名による表記の名前が最後に上位10上位に入ったのは、1919年である。男子生徒の名前でも似たような傾向が見られる。金八先生あきひこのクラスでは、名乗り訓を二つ用いた4拍もの（「明彦」や「慶貴」）が五つもあったのに対し、1985年ではそういったのが上位10位に入っておらず、実際に4拍の名乗り訓を用いた名前が最後にリス

表4 「3年B組金八先生」の第5シリーズの生徒の名前と明治安田生命保険の1985年生まれの赤ちゃんの名前ランキング上位10位 (明治安田生命, 2014より)

| 金八先生 * あいうえお順 | 女性 明治安田生命 | | 金八先生 * あいうえお順 | 男性 明治安田生命 | |
|------------------|--------------|-------|------------------|--------------|-------|
| | 漢字名 | ランキング | | 漢字名 | ランキング |
| アスミ | 愛 | 1 | 明彦 | 大輔 | 1 |
| カオル | 麻衣 | 2 | 篤 | 拓也 | 2 |
| 加奈恵 | 麻美 | 3 | 和憲 | 直樹 | 3 |
| サオリ | 恵 | 4 | 邦平 | 健太 | 4 |
| ちはる | 香織 | 5 | 敬太 | 和也 | 5 |
| 敏江 | 彩 | 6 | 健次郎 | 達也 | 6 |
| 友子 | あゆみ | 7 | 好太 | 亮 | 7 |
| バーバラ | 友美 | 8 | 三郎 | 翔 | 8 |
| 真規子 | 舞 | 9 | 修三 | 洋平 | 9 |
| 雅子 | 裕子 | 10 | 照孝 | 徹 | 10 |
| 美佳子 | | | 幹洋 | | |
| 恵美 | | | 祥夫 | | |
| 由佳 | | | 慶貴 | | |
| 有里子 | | | 力也 | | |
| 蘭子 | | | 良輔 | | |

トに登場したのは1969年である。

少なくとも明治安田生命のデータに基づいて判断する限り、金八先生の生徒たちの名前を「1985年生まれ」らしくすることが重要だったのであれば、漢字1文字の名前、もしくは女子の場合、「美」の付く名前、また男子の場合、「也」の付く名前を増やすべきだったが、ドラマ内の登場人物のネーミングを決定するのは、その作成にかかわる脚本家や監督などである。ところが、自分とは世代や性別が異なる登場人物であれば、「ふさわしい」「それらしい」名前を決めるのには、ある程度想像力に任せる他ないのである。すなわち、接することが比較的少ないため、他世代の登場人物のネーミングを行う場合は、自分の持っている情報を参考に適切なものを推測することになる。その際、本人の経験で形成されてきた規範やメディア等で注目を浴びた情報がガイドラインとして機能するのだが、正確な情報が不足している中、他世代に対するイメージに依拠する部分が多くなる。その結果、実際の傾向を正しく反映していないことがやむを得ないであろう。余談になる

のだが、この問題は登場人物の名前に限るものではない。水本(2006)がドラマにおける女性語使用を観察したところ、女性的な文末表現(「わよ」「かしら」等)が実際の会話で見られる以上に使用されていることが明らかになったが、興味深いことに、脚本家の性別や年代がその使用に影響を及ぼしていることも分かり、上記の名前の付け方と似たずれが生じている。重要なポイントは、無意識にとは言え、実際の傾向を反映していない名前をドラマの登場人物に付けることが、規範的な価値観を視聴者に促進することにつながると考えられるであろう。

6. 新しい名前に対する評価の「誰」

さて、このように、「普通」だという名前に対する経験的知識と事実には大きなずれが生じやすいのだが、このずれは、誰がいつ名前を評価するのにかかわるのである。読めるか読めないかという側面にだけ着目すると忘れてしまいそうだが、どのような名前でも、それなりの理由があって名前が選択され付けられるもの

だと考えてもよいであろう。ところが、名付けの「誰」から始めると、その理由を知る・知らない、つまり名付けの理由に関する情報量も、評価する人によって異なるのである。子どもの名付けに取り巻く諸事情を最も理解しているのはむしろそう名付けた人、つまり多くの場合親なのだが、自らの行動であるため、どういった過程を経てその名前に辿り着いたのかも知っているであろう。名付ける人と比べ、名付けられる張本人である子どもには情報が少ないはずだが、上記の記事分析で指摘したように、名前の由来について話すことが親子の絆を深める行為だと解釈できる。親自身から名前の由来について話すこともある他に、子ども本人の好奇心で自ら尋ねることもあり、その欲求が自然に湧いてこなくても、学校の課題として指定されることがあるように、社会的に尋ねるように促されることが多いであろう。

しかし、いうまでもなく、第三者は、関係者に聞かない限り名付けの理由を知ることはないため、持っている情報量が不足しており、名前の評価がその分だけ単純になる傾向があると考えられる。また、第三者として、他者の名前前で不便を感じることもある場合があるとすれば、それはその名前が書かれたときに読めるかどうかだと考えられるため、評価ポイントとして読みやすさに注目することが多いとも考えられる。だが、捉え方が単純な分だけ、当事者である親と子どもと比べると、ずれが生じやすいであろう。実際に、読みにくい名前が一般的に悪く評価されているようだが、徳田他(2013)が、子どもを幼稚園・保育園に通わせている母親508名に実施した調査の結果によると、子どもの名前が間違えられたことがある人は24%であるのに対し、協力者の90%が、この名前にしてよかったと評価している。付けた名前に不満を思った10%が全員読み間違えられたことがあると答えた人だとしても、この結果から読みにくいのか関係なく、一概として親が自分の付けた名前に満足していると言えるであろう。

この点について、本稿の題名にも利用された「キラキラネームといわないで！」という、発言小町への投稿を具体例として観察すれば、より深い理解が得られるであろう。いうまでもなく、発言小町が電子悩み掲示板である以上、でたらめと思われる投稿もあるのだが、率直な体験談や本音が聞ける貴重な資料でもあり、新しい名前の語られ方や読みにくい名前を付けられた人の体験談を観察するのに役立つ。さて、投稿者のことねは、30代の1児の母と自称し、自分の名前が、若干珍しい漢字・漢字の読みを使っているため、「キラキラネーム」という呼び方の普及に伴い、「貴女の名前はキラキラネームだねー」と言われるようになった。また、娘にも自分の名前から1文字を取って付けたの

だが、「そしたら…まあ言われる言われる」と、同様に「キラキラネーム」と認識される(ことね, 2014; 以下同様)。ところが、投稿者からしてみると、「(…)ちゃんと神社でいただいた名前ですし、意味合いもとても気に入っている名前(…)」で、親からの最初の贈り物として有り難く受けている。何よりも、本人から見れば「ちゃんと社会(だれでも知ってる歴史の登場人物と同じ漢字の読み)や国語を勉強しているならそんな「ありえない！」なんて名前ではない(…)」のであり、名前ですら就活の場面等で損を受けたことがあることも否定している。若干読みにくいことを認めつつ、「キラキラネーム」と呼ばれる＝自分と親に対する悪い評価を受けることが、不公平であることを訴える相談である(「少し読めないだけでなんでもキラキラと決めつけるなんて失礼だと思いませんか? / 「そんな名前でも可哀想」「親が非常識」とか、余計なお世話です。」)。

つまり、名付けられた本人として、親から名前の由来・名付けの過程を聞いており、それで納得しているため、自分では満足している。同様に、当然ながら名付け親としても自分の娘の名前をなぜ付けたのかも理解しているから、娘の名付けも、とくに問題視していないのである。しかしながら、名付けに直接かかわっていない第三者には、そういった情報がないため、読みやすさが「よい名前」なのかどうかの唯一の基準になってしまうことがあり、当事者とずれた評価を下すことが多いであろう。換言すれば、より多くの情報を知っているため、当事者の名付けに対する評価は多面的であるのに対し、情報量がそれだけ少ないため、第三者の評価が一面的になる傾向があると言えよう。今まで見てきたように、新しい名前に対する批判の中に、名付けられた側の立場を装っているものもあるが、実際に、ことねの投稿に対する返事を見る限りでは、やはり第三者にとって負担を重くするという読めないことだけを基準にしている比較的単純なものが多い(例: 「ごめんなさい／読めないだけって簡単に言いますが／十分それだけで「キラキラ」の理由だと思います。／読めない名前…／自己満足すぎて…」。「予想／世間の反応が予想出来ないことが残念。／普通に読める範囲で工夫するのが親の責任です。」「貴方やご両親を非常識とは思いますが、配慮に欠けていた、もう少し判りやすい／名前を付けても良かったのではないのでしょうか。」)。

さらに、「キラキラネーム」という概念の普及による再分析が見られていることにも注意すべきであろう。問題視されている新しい名前が1990年代中旬以降の傾向であることが正しければ、30代の人に該当する批判ではないはずで、投稿者が明らかに「DQNネーム」「キラキラネーム」という概念の普及とその傾向に対す

的な位置付けがこうして十分に把握されていないため、新しい名前に対する批判が、果たして適切なのか疑問として浮き彫りになる。不確実なことが多い中で、新しい名前のインパクトを懸念すべきではないとまでは言えなくても、上記の考察を踏まえれば、読みにくいとされている新しい名前が、思われている程大きな波紋を呼ばないと考えてもよいであろう。

8. まとめ—若者問題として見る新しい名前

このように、第三者を中心に行われていること、また過去の流行把握・将来の状況推測における不確実性で新しい名前に対する批判の一部が説明できるものだと考えられるのであろう。実際に評価のあり方を考えると、創造的側面を考慮すれば、新しい名前を肯定的に評価することも可能だろうが、本稿の目的は、そうして評価することにはないことを強調したい。それよりも、新しい名前に対する批判で見られる危機感は、名前に限ることではなく、とくに若者にかかわる諸社会問題と類似しているところがあることに注意すべきであろう。Toivonen & Imoto (2011) によると、オタク・援助交際・ひきこもり・パラサイトシングル・児童虐待…といったように、とくに70年代以降若者の生活スタイルや価値観がメディアで問題として注目を浴びるようになったのだが、そういった若者問題 (youth problems) は、日本社会における変化を反映しており、ほとんどすべての若者問題は、文化的に適切とされている社会的役割の不完全もしくは遅れた継続に関連しているという。また、自然資源が少ない日本にとっては、若者が貴重な資源であり、若者の社会化がそれだけ重要であるため、その社会化を妨げるとされる要因が危機感を及ぼすことがある (Goodman, 2011, p. 164)。

換言すれば、ある現象を若者問題として扱うことの意味の一つは、若者に従来の価値観を継続させ、規範的な社会化を促進させることだと考えられるが、この点は、近年の新しい名前の批判にも該当することであろう。表面的に新しい名前が具体的な生活スタイルや価値観とかかわっているようには見えないが、上記の考察から明らかになったように、新しい名前を付ける動機や批判に「個人的なものがよい」、「他者をより配慮すべき」といった価値観が潜んでいると考えてもよい。また、新しい名前に対する危機感も、「若者問題」の中に位置付けることができるのではないかと。すなわち、近年の新しい名前に対する批判は、他方では日本語および日本社会で問題とされている現象 (国語力の低下と識字の問題、個人を中心とした世界観と家族における変化、他者に対する意識と公共性の喪失、等々) と結び付けることができる。一方では、読みにくいとさ

れている新しい名前の負担に着目することにより、若い親世代に「他者を配慮する」「目立たない方がよい」といった価値観を継続させるように促進することができ、規範的な価値観の再生につながるであろう。

実際に、近年の新しい名前を若者問題として見なすことがどういった意味を持っているのかを考察するのが今後の大きな課題として残さざるを得ないのだが、最後に、新しい名前という現象に対するネーミングに再び注目したい。実は、新しい名前を一つの若者問題として見なせば、「DQN ネーム」と「キラキラネーム」に見られる基準のずれ・曖昧さも説明できる。「ひきこもり」「ニート」「不登校」がすべて同一現象を指すために用いられることがあるように、若者問題の言説では対象のネーミングに揺れが見られることも多々あるのだが、Toivonen & Imoto (2011, p. 21) が指摘するように、そのネーミングの揺れが、ニートよりフリーター、フリーターより正社員…といったように、対象のヒエラルキーを設定するのに有効である。その同時に、ネーミングが象徴として機能し、異なるグループによって異なる意味を持たせられるため、多声性 (multivocality) に豊富で、それまでに表現不可能だった問題に取り組むことを可能とするという。問題的だとは言え、「DQN ネーム」「キラキラネーム」という呼び方が生まれたことにより、最近の名付けにおける変化に対する意識がより高まったと言えるが、他の若者問題と同様であれば、これから新たな呼び方がさらに現れる可能性があるであろう。その意味では、今後新しい名前に対するネーミングに引き続き着目することが、現象のあり方を把握し、新しい名前の評価を考えるのに極めて重要なポイントだと言えよう。¹¹⁾

注

- 1) 本稿の題名は、以下で分析する発言小町への投稿「キラキラネームといわないで！」(ことね, 2014) にちなんだものである。
- 2) 本稿の一部は、筆者が2014年の国際日本学会で発表した内容に基づく。
- 3) 2005年2月現在では、著作権問題で futamitter からの直通ビデオが削除されているが、ミラーリンクという形で、omosiroi sugoi (2014) のように、他に数件出ている。いずれは同じ問題で削除されるだろうが、面白いと評した視聴者がいる限り、ミラーが繰り返して出現する可能性が高いのである。
- 4) 投票は名前の印象について上から下へ「ステキ!」「なかなか!」「まあまあ!」「うーん…」「目が点…!」から選ぶことになっているのだが、他の選択肢の意味と順番的に最下にあることから「目が点…!」は、印象が非常に悪い場合の選択だと考えられる。

- 5) 「水子^{みずこ}」の例から明らかなように、「キラキラネーム」の基準そのものに若干の揺れが見られる。「水子」の場合、適切でないとしてされている理由は、流産等で死亡した胎児のことを指している、つまり不吉な意味を持っているからであり、読みそのものとは関係がないのである。「水子に関するコメント」では「本人は意味を知らなかったようで、意味を教えると泣きながら、教えてくれてありがとう」と… (赤ちゃん命名辞典, 2015)」という説明が見られ、この解釈を裏付けている。
- 6) キラキラネームの指標が初めて出たのは2009年11月だが、上昇傾向に入ったのはその1年後である。
- 7) Googleトレンドのヘッドラインデータでは、この記事は二つともマイナビニュースから来たものに見えるのだが、マイナビニュースは主にニュースまとめサイトであり、詳しい検索の結果、元の記事はそれぞれYahooのトレンドニュースと弁護士ドットコムからだと考えられる。
- 8) 2004年から公開されるようになったため、第5シリーズには間に合わなかったはずだが、一般的に言えば脚本家も明治安田生命やその他のデータを活用し、登場人物と同世代の名前をより正確に反映させることができるはずだが、多くの場合、そこまでのリアル性が求められない。第一に、視聴者が必ずしも登場人物と同世代とは限らず、同世代であっても、脚本家と同様に、登場人物の名前が該当世代の傾向を正確に反映しているのかを判断することができないことが多いであろう。むしろ、視聴者の多くが他世代であれば、リアル性に欠けても、視聴者が馴染みやすい名前にした方がよい可能性もあるであろう。第二に、フィクションであるが故に、名前が純粋に流行に沿って決まるのではなく、ステレオタイプに基づいた言葉遣いという、金水 (2003) の役割語と同様に、物語の中での役割に応じて選ばれることもあるであろう。「3年B組金八先生」第5シリーズに現れた「加藤バーバラ」がそのよい例であろう。母がアメリカ人で父が日本人だという設定のこの登場人物の名前は、自分がハーフであることを前出しにしており、国際的な道を歩むことにする彼女を象徴するものとして選ばれたと考えられる。加藤バーバラを演じたのは、南アフリカ人の母と日本人の父に生まれた大山千穂だが、この場合、実際にハーフの子どもに国際的な名前が多いのか、和名が多いのかは実はさほど重要なのではない。なぜならば、「バーバラ」というのがアイデンティティの象徴となった以上、そう機能さえすれば、リアルであるかどうかは問題外となるからである。
- 9) ユーザー名で投稿するのが発言小町の特徴の一つ

であるが、原則として自分で選べることになっており、一般的に偽名だと考えられる。

10) 「/」で原文の改行を示す。

11) 本研究はJSPS 科研費70632595の助成を受けたものである。

参考文献

- 赤ちゃん命名辞典 (2014). キラキラネーム名前・名付けランキング 2014年10月28日 <<http://www.baby-name.jp/itai.php>> (2014年10月28日)
- 赤ちゃん命名辞典 (2015). 水子 (みずこ) 女の子 赤ちゃん命名辞典 2015年2月10日 <<http://www.baby-name.jp/name98/98779.php>> (2015年2月10日)
- Unser-Schutz, G. (2011/1). Manipulating readings: New trends in the structural patterns of Japanese baby names. Paper presented at the American Name Society, Pittsburgh, USA.
- Unser-Schutz, G. (2014/1). Selecting data on names: City newsletters as a resource for Japanese names research. Paper presented at the meeting the American Name Society, Minneapolis, USA.
- 円満字二郎 (2005). 人名用漢字の戦後史 岩波書店
- 大越和美・徳田克己・水野智美・西館有沙・西村実穂・安心院朗子 (2013). 名づけの心理4 : 読み間違えられる名前・読めないと言われる名前 日本教育心理学会総会発表論文集, No.55, 297.
- omosiroi sugoi (2014年). 【面白動画】キラキラネームだらけの3年B組. wmv YouTube 2014年2月9日 <https://www.youtube.com/watch?v=y23k4q7DbBE&feature=youtube_gdata_player> (2015年2月10日)
- かどや ひでのり (2010). 日本の識字運動再考 かどや ひでのり・あべ やすし編 識字の社会言語学生活書院 pp.25-82.
- 川添 圭 (2013). 「こんなキラキラネームはいやだ！」子供による「改名」が認められる条件は? 弁護士ドットコム 2013年2月24日 <<http://www.bengo4.com/topics/203/>> (2015年2月10日)
- 金水 敏 (2003). ヴァーチャル日本語一役割語の謎 岩波書店
- Googleトレンド (2015). Googleトレンド - ウェブ検索の人気度: キラキラネーム, dqn ネーム, 珍奇ネーム - すべての国, 2004年 - 現在 Google 2015年2月10日 <<http://www.google.co.jp/trends/explore#q=%E3%82%AD%E3%83%A9%E3%82%AD%E3%83%A9%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%83%A0%2C%20DQN%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%83%A0%2C%20%E7%8F%8D%E5%A5%87%E3%83%8D%20>>

- E3%83%BC%E3%83%A0&cmpt=q&tz=) (2015年2月10日)
- Goodman, R. (2011). Shifting landscapes: The social context of youth problems in an ageing nation. In R. Goodman, Y. Imoto & T. Toivonen (Eds.), *A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs*. New York, USA: Routledge. pp. 159-173.
- ことね (2014). キラキラネームといわないで！ 読売新聞・発言小町 2014年7月25日 <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2014/0725/671130.htm?g=01>> (2015年2月10日)
- 小林大祐 (2001). 名前の社会的分析に向けて:漢字がつくる同一性のなかの差異 評論・社会科学, No.65, 23-41.
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史—「個性的な名前」をフィールドワーク 風響社
- Komori, Y. (2002). Trends in Japanese First Names in the Twentieth Century: A Comparative Study. *International Christian University Publications 3-A: Asian Cultural Studies*, No. 28, 67-82.
- 佐藤稔 (2002). 「名乗り字」の逸脱／「名乗り字」からの逸脱 国立国語研究所編 日本語の文字・表記—研究会報告論集— 国立国語研究所 pp.99-119
- 佐藤稔 (2007). 読みにくい名前はなぜ増えたか 吉川弘文館
- Taylor, I., & Taylor, M. M. (1995). *Writing and Literacy in Chinese, Korean and Japanese*. Amsterdam, the Netherlands: John Benjamins.
- Toivonen, T., & Imoto, Y.. 2011. Making sense of youth problems. In R. Goodman, Y. Imoto & T. Toivonen (Eds.), *A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs*. New York, USA: Routledge. pp. 1-29.
- 徳田克己 (2004). 名づけの心理 2 : 読みにくい名前の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, No.46, 623.
- 徳田克己・水野智美・西館有沙・西村実穂・安心院朗子・大越和美 (2013). 名づけの心理 3 : 10年前の調査結果との比較 日本教育心理学会総会発表論文集, No.55, 296.
- 中田綾美 (2013). キラキラネームでいじめ被害…「子どもの改名」法律的に可能か? Wooris 2013年12月10日 <<http://wooris.jp/archives/60027>> (2015年02月10日)
- 橋本淳治・井藤伸比古 (2011). 「子」のつく名前の誕生 仮説社
- はてなキーワード (2015). DQN Hatena 2015年2月10日 <<http://d.hatena.ne.jp/keyword/DQN>> (2015年2月10日)
- futamitter (2011). DQN ネームだらけの3年B組 【最後のホームルーム】 YouTube 2011年12月5日 <https://www.youtube.com/watch?v=CCwWwbJE4S0&feature=youtube_gdata_player> (2014年10月28日)
- 本田明子 (2005). 赤ちゃんの名付け 日本語学, 24 (12), 54-62.
- 牧野恭仁雄 (2012). 子供の名前が危ない バストセラーズ
- 水本光美 (2006). テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ 日本語ジェンダー学会編 日本語とジェンダー ひつじ書房 pp.73-94
- 明治安田生命 (2014). 名前ランキング2014—生まれ年別名前ベスト10 明治安田生命 2014年11月30日 <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/index.html> (2015年2月10日)
- リアルライブ (2012). 宇多田ヒカルは「かわいそう」、しかし芸能界にはキラキラネームがたくさん? Real Live 2012年7月1日 <<http://nnp.co.jp/article/detail/37580772/>> (2014年10月29日)
- Lieberson, S. (2010). *A Matter of Taste: How Names, Fashions, and Culture Change*. New Haven, USA: Yale University Press.
- 八木澤姫茉莉 (2012). 難問過ぎるキラキラネーム試験 春夏冬くん・日桜ちゃん・月下美人ちゃん—あなたは読めますか? トレンドニュース 2012年11月14日 <<http://trendnews.yahoo.co.jp/archives/135017/>> (2015年2月10日)

要約

近年においては、日本の名前が大きく変わりつつあると言われており、最近の名前の新しい特徴として、漢字の用法が特殊で、一般的に読みにくいことが挙げられている。「DQN ネーム」や「キラキラネーム」とも呼ばれている新しい名前に対する批判が、通常でない漢字の読みを用いること・それらの名前を読まないといけぬ他者のことを充分配慮していないことに着目しており、全体的に厳しい。しかしながら、新しい名前のメディアにおける語られ方や、現象としての出現を考察することにより、そういった批判的評価は必ずしも適切なものではないことが明らかになる。とくに、新しい名前の評価が名付け親でも名付けられた子どもでもない第三者を中心に行われているため、名付ける理由と背景が十分に考

慮されていないと考えられる。さらに、過去の名付けの傾向と今後の変遷の推移が把握し難いため、名前に対する批判が歴史性に欠けていることが指摘できる。こういったことを踏まえ、新しい名前が若者問題の一つと考えられ、名付けにおける変遷を社会化・社会変化というより大きな枠組みの中に位置付けることができると論じる。

キーワード：キラキラネーム、名付け、若者問題